

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のＡ・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 情報源を秘匿する。

(2) 満月が霧に潤む。

(3) 才媛と呼ばれた先輩に憧れる。

(4) 曖昧な表現をする。

(5) 多岐亡羊の感があって目標が定まらない。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) フクワジュツを習い始めた。

(2) 思考のメイキュウから抜け出す。

(3) ニガい経験から学びを得た。

(4) 調理の仕上げにバイニクを用いる。

(5) 選挙結果はゲバヒョウの通りだった。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

プロのフルート奏者を目指す陽菜は、東京郊外の奥瀬見町でカフェを営む姉の亜季の家に、夏の間滞在している。姉の家の近くには、世界的オルガン作家の芦原と、彼の娘の朋子が営むオルガン工房がある。工房では、町の人々の力を借りて、新しいオルガンを作るというプロジェクトが始まっていた。

二階に上ると、シャコ、シャコという擦過音が聞こえてきた。

ひとり、朋子さんがいた。作業机に向かい、材木をカンナで削っている。⁽¹⁾彼女の周囲だけ、空気が冷たい感じがした。

一階でワイワイと作業している人たちは、明らかに温度が違う。体幹がぶれずに、カンナが均一の力と速度で木材の上を走っている。薄く削られた木屑が、心地よい音とともに空中に舞う。一切の無駄が削ぎ落とされた、機能美すら感じさせる所作。

綺麗だ、と思った。十二年間、毎日フルートの練習を続けていた私には判る。朋子さんはこの作業を、数え切れないほど繰り返しやってきている。

「少しここで待っていてください。倉庫から、木管を持ってきます。」

「え、あ、ちよつと……。」

芦原さんは聞かずに、一階へ下りていってしまう。

擦過音が、止んだ。

朋子さんが手を止めて、私のほうを見ていた。

「こんにちは。」

私は仕方なく笑顔を作って、手を振った。

「……うん。」

朋子さんはそれだけを言って、再び木材にカンナをかけはじめた。

ただ、シャコシャコという音が、さつきまでよりも微妙に鈍^{にぶ}くなっている。その音程の変化に、私は彼女の心の揺れを感じた。

「朋子さん。私のこと、知ってたんですね。」

彼女は、私の言葉を待っている。

「コンクール、見に来てくれたんですね。姉から聞きました。フルート、お好きなんですか？」

「いや、まあ……。」

「カフェにある彫刻、朋子さんが作ったんですね。可愛^{かわい}くて好きです。私、ああいうの作れないんで、憧れます。朋子さんは。」

「朋子でいいよ。」

朋子さんは、困ったように頭をかいた。

「私たち、タメだから。亜季さんから聞いてない？ 敬語、やめて。なんか、痒^{かゆ}い。」

「あ、うん……判った。」

「コンクールは、たまたま都心のほうに用事があつて、ついでに寄っただけだから。フルートのことは、よく判らない。ごめん。」

朋子さんは突き放すように言つて、再びカンナをかけはじめ。棘^{とげ}のある口調に、私は驚くよりも不思議な気持ちになった。

私がおか、しただろうか？ 会ってからふたりで話すのは、初めてだ。彼女の怒りを買うようなことを言ってしまったとは思えない。なぜこんな態度を、取られなければならないのか。

「お待たせしました。」

芦原さんが階段を上ってくる。気まずい空気が攪^{かきま}拌されたことに、私はほっと息をつく。

彼の手には、細長い箱が握られていた。

「これが、パイプオルガンの木管です。」

六十センチほどの長さの、直方体の箱だった。空気を吹き込む部分と、

空気が出ていく歌口が開いていて、中は空洞のようだ。素材が違うだけで、構造は金属のパイプと同じに見える。

「奥瀬見は江戸時代から炭産業が盛んで、色々な木があります。森の中を歩くと、かつてあった炭焼き窯^{がま}の跡がたくさんあるのです。」

芦原さんが木管を吹くと、素朴で可愛らしい音が鳴った。リコーダーの音に似ているが、オルガンの木管は重心が低く、どっしりとした安定感がある。

「ナラの木管です。オルガンは大量に木材を使うので、制作する場所の近くで採れる木材を使います。イタリアでは糸杉がよく使われますし、スプルースというマツ科の植物を使うことも多いです。スプルースは、ピアノの響^{きこ}板^{ばん}とか、ギターのトップ板などにも使われますね。」

「朋子さ……朋子、が削っているのも、ナラですか。」

「ナラだと思えますか。」

その質問を待っていたというように、芦原さんは不敵に微笑^{ほほえ}んだ。

「木製フルートは、なんで作られているのか、ご存じですか。」

「ええと……グラナデイラ、ですよ。」

「正解。クラリネットやオーボエなどでも、グラナデイラを使います。ではなぜグラナデイラを使うか、判りますか。」

「音がいいんじゃないですか。」

「音がいい、とは？」

ぼんやりしたことを言ってしまったのを、芦原さんはすぐに聞き咎^{とが}めてくる。

「この前お渡ししたトラヴェルソ^{*}は、楓^{かえで}でできています。いまはフルートに楓はあまり使われませんが……これは、音が悪いからでしょうか？」

「判りません。楽器職人が長年試行錯誤してみても、グラナデイラのほうがいいということを発見したんじゃないんですか。」

「でも、ファゴットは、いまでもほとんどが楓で作られています。なぜ

ファゴットにはグラナデイラが使われないのか。そもそも、オーボエやクラリネットでも、グラナデイラが使われたのはごく最近で、バロック時代は梨や楓などを使っていました。オーボエは黒い楽器が多いですが、バロックオケを観に行くと、赤や焦げ茶の楽器で吹いていますよね。」

「より優秀な木材が出てきて、古いものは駆逐された——わけではないんですか。」

「と、言われますけど、僕はそれは、怪しいと思ってます。」

芦原さんの目が、一瞬、鋭く光った。

「グラナデイラは、アフリカの熱帯に生えている木です。これが西欧の楽器に使われるようになったのは、十九世紀から二十世紀の植民地政策に大きく影響を受けています。アフリカから木材を調達できるようになったので、グラナデイラが幅広く使われるようになったのです。」

「でも、楽器に向いてる木だったんですね。」

「比重が大きく硬いので、向いているとは言われます。ただ、それがどこまできちんと研究されたものなのかは怪しいと思ってます。というのも、楽器は綺麗に鳴りきるまでには時間がかかります。オルガンでも、ポテンシャルをすべて解放するまで数年は鳴らし続けなければいけない。一方、プロの奏者は日々の仕事をこなさなければなりませんから、新しい素材の楽器を渡して、毎日仕事に使ってもらうことなんてできません。当然、広く使われているグラナデイラが選ばれるようになる。結果的に市場には、同じ素材の楽器が出回るのです。」

「なるほど。」

「楽器に何の素材が使われるのかは、慣習と、安全策と、商業上の要請から決まります。我々人類は、あらゆる木材の検証を充分にできているわけではない。本当に優れた木管の材料を、まだ発見できていないかもしれません。」

(3) 面白い。

いままでなんとなく、楽器は改良に改良を重ねられていまの最終形になったのだと思っていた。でも芦原さんの話を聞いていると、まだ楽器は発展途上で、様々な可能性を切り落としてしまっているように思える。

「オルガンなら、できます。」

芦原さんは、不敵な笑みを浮かべた。

「オルガンはどの楽器も、必ず受注生産の一点ものです。木管楽器と違い、同じモデルを大量生産するタイプのビジネスではないので、創造できる余地が広い。新しい素材を研究開発していくのも、オルガンビルダーの役割だと思っています。例えばあれば——桐です。」

カンナをかけている朋子を指差して、言う。

「和琴などに使われる、とても軽い木です。桐を木管パイプに使うことは、まずありません。材木屋に相談したら、奥瀬見でいい桐材が取れるのだと教えてくれました。どんな音がするのか……楽しみです。」

芦原さんは、どこか恍惚とした様子で言う。その音を聴いてみたいと、私も思った。

「朋子。一本、作ってみよう。」

朋子がぴたりと手を止め、芦原さんを軽く睨むように見た。

「まだ、削ってる途中だけど。」

「それはあとでいい。桐材の板が何枚あるから、一本組み立てて音を見てみよう。陽菜さんにも、その過程を知ってもらいたい。」

「やりかけの作業を、中断したくない。」

「申し訳ないね。さあ、早く。」

こういうことには慣れているのか、朋子のため息をつき、こちらを見ようともせず、一階に下りていった。苛立った様子に肝が冷えたが、芦原さんは何も動じていない。私たちが微妙な緊張関係にあることにも、気づいていないようだ。

「いま作っているオルガンは、高さ五メートル程度の、小さいオルガ

ンです。」嬉しそくに、説明をはじめ。

(逸木裕「風を彩る怪物」による)

〔注〕木管——ここではオルガンの音を出すために必要な木製の部品を指す。

響板——楽器の音を大きくする共鳴板。

トップ板——ギターの表面の板。

トラヴェルソ——フルートの前身である横笛。

バロックオケ——十七世紀初頭から十八世紀半ばまでにヨー

ロッパを中心に栄えたバロック音楽を演奏する

オーケストラ。

和琴——日本の弦楽器。

恍惚——物事に心を奪われて、うっとりすること。

〔問1〕⁽¹⁾ 彼女の周囲だけ、空気が冷たい感じがした。とあるが、「私」が

そのように感じたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 一心不乱にカンナをすべらせる朋子の姿に、他者を寄せ付けられないような威圧感を感じ、尊大だと思ったから。

イ ひとり集中してカンナがけをする朋子の姿に、長期間の鍛錬による洗練されたものを感じ、圧倒されたから。

ウ 黙々とカンナをすべらせる朋子の姿が、フルートの練習を続ける自分自身と重なり、身が引き締まったから。

エ 孤独にカンナがけをする朋子の姿が、一階のにぎやかさとの対比で浮き彫りになり、さびしく見えたから。

〔問2〕⁽²⁾ 気まずい空気が攪拌されたことに、私はほっと息をつく。とあるが、「私」はなぜ「ほっと息をつ」いたのか。その理由として

最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 芦原さんが声をかけたことによって、「私」を一方的に無視し続ける朋子と二人きりで向き合う必要がなくなったから。

イ 芦原さんが声をかけたことによって、朋子が望む距離感をうまく作り出せず反発し合っている状況が止められたから。

ウ 芦原さんが来たことによって、朋子を非難する「私」の発言でぎくしゃくしてしまった場がうやむやになったから。

エ 芦原さんが来たことによって、「私」を拒絶するかのような態度をとる朋子との間に漂った窮屈な雰囲気緩和が和らいだから。

〔問3〕——面白い。とあるが、このように「私」が思ったのはなぜか。

その理由として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 現在の楽器は、長い年月を重ねて作られた完成形だと思っていたが、今後もまだ発展の余地があることが分かり、自分の固定観念が取り払われ、楽器のさらなる可能性を感じることができたから。

イ 現在の楽器は、アフリカで育つ素材で作られる改良の余地のないものだと分かったが、安全性と商業上の要請を満たすことができれば、日本における楽器作りの青写真を描けると気づいたから。

ウ 現在の楽器は、様々な素材を試し改良を重ねられた完成形だと思っていたが、原産地特有の気候に深く関係してできあがったことを知り、日本でも新しい取り組みや改良ができると気づいたから。

エ 現在の楽器は、プロの奏者の意見を取り入れ完成したと思っていたが、制作者が奏者の意見を尊重していなかったため音色が安定しないことを知り、改良によって音色が一律になると分かったから。

〔問4〕 朋子さんとあるが、この文章から読み取れる朋子の人物像の説

明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 楽器制作へのこだわりが強く、努力を惜しまないが、自身の領域に入ってこれるのを絶対に許さない人物。

イ 楽器制作ではなく彫刻作りに集中したいが、本音を言い出せず、楽器作りに対して不信感を抱いている人物。

ウ 無愛想で、淡々と仕事をしているように見えるものの、実はひたむきに楽器づくりに取り組んでいる人物。

エ 自分の信じた方法で楽器を完成させたいのに、芦原さんのオルガンづくりに振り回され、困惑している人物。

〔問5〕 この本文中に使用されている表現の説明として適切でないものを、

次のうちから選べ。

ア 「私」と芦原さんの関係性を分かりやすく示すために、「私」と話をする芦原さんの言葉遣いに「お待たせしました。」「これが、オルガンの木管です。」のような丁寧な言葉を多用している。

イ 音色に対して鋭敏な感覚をもつ「私」の人物像を深めるために、「ただ、シャコシャコという音が、さつきまでよりも微妙に鈍くなっている」などかすかな音の差に反応する描写を加えている。

ウ 登場人物の困惑や期待といった感情を視覚的にも描き出すために、「ええと……グラナデイラ、ですよね。」「どんな音がするのか……楽しみです。」など、「……」という記号を用いている。

エ 芦原さんのオルガン職人としての誇りやこだわり、神経質な一面を丁寧に表現するために、「高さ五メートル程度の、小さいオルガンです。」というような具体的な数字を各所で用いている。

次のA、Bの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

あるものが別のあるものの代わりとしてそれを表わしている時、その働きは「記号機能」、そしてその働きを担っているものは「記号」と呼ばれる。コードに基づくコミュニケーションの場合は、メッセージを構成するのに用いられる「記号」はもとからコードに定められているわけであるから、このような場合には何が「記号」であり、何が「記号」でないかはきわめて明瞭である。このような場合は、「記号」の概念が「記号機能」の概念に優先しているように思える。*モールス信号の「トン・ツー」はコードに記載されているから「記号」であり、コードの規定に従って日本語なら〈イ〉、英語なら〈a〉を表わすといった「記号機能」を果す。これに対し、「推論」型のコミュニケーションでは、必ずしも「記号」がもととも存在しているのではなくて、当事者が自らの主體的な判断に基づいて、あるものが別のあるものを表わしている（つまり、そこに「記号機能」が存在している）と認定する。その瞬間にそのものは「記号」となる。ここでは、「記号」の概念よりも「記号機能」の概念の方が先行することになる。このやり方で、人間は事実上すべてのものを「記号」にすることができる。人間はすべてのものにことばを与えることができる創造主なのである。

「記号」という形で捉えるにせよ、また「記号機能」という形で捉えるにせよ、そこに見られるのは「あるものが別のあるものを表わす」という規定に含まれている二つの「あるもの」の間に相互依存の関係が存在しているということである。この二つの項をそれぞれ「記号表現（シニフィアン）」と「記号内容（シニフィエ）」と呼ぶことにする。そうすると、「記号」ないし「記号機能」は「記号表現」と「記号内容」という

二つの項の間の相互依存の関係に基づいて成り立っているということになる。

このいずれの項を欠いていても「記号」ないし「記号機能」は成り立たない。例えば、人間のことばを真似てオウムが「オハヨウ」と言った場合、一見、人間の使うのと同じ記号が発せられたようではあるが、オウムにとつては少なくとも人間のものと同じ記号内容によって裏づけられているわけではなからうから、オウムにとつては人間にとつてと同じ「記号」であるとか、「記号表現」であるとは言えない。逆に、内容はあつても表現を与えられていなければ、それも「記号」でも「記号内容」でもない。また、人間の主體的な解釈によつて「モノ」が「記号」化するという過程の場合でも、ある意味（「記号内容」）が読みとられて初めて、そのものは「記号表現」に化しているわけである。

(1) このように、「記号表現」と「記号内容」が論理的に相互依存の関係にあるということは十分明らかであろう。しかし、同時に注意しておくなくてはならないのは、両者の相互依存の関係は心理的には必ずしも常に対称的なものではないということである。日常のことば遣いでは、しばしば「記号」ということばが事実上「記号表現」のことを指して用いられることがある。（例えば、「この記号（＝「記号表現」）は（止まれ）を意味する」などと言う場合である。）この場合、「記号表現」が「記号」全体を代表しているわけである。逆に「記号内容」でもって「記号」全体を代表させるとするのは困難であろう。

このことは、記号の二つの側面のうち、「記号表現」の方がわれわれにとつて何らかの形で知覚できる対象であるのに対して、「記号内容」の方は必ずしもそうではないということによるのであろう。記号表現の方はすぐ「目につく」記号の側面であるから、それは容易に「記号」そのものの存在と結びつき、「目につかない」記号内容の存在を暗示する。(2)（例えば英語の sense が〈感覚〉と〈意味〉という二つの語義を併せ

持っているのは、たいへん示唆的である。〈感覚〉されるものは〈意味〉を持つのである。〕記号の二つの側面の間の関係がこのように非対称的になりうるということは、いくつかの重要な意味合いを持っている。

「記号表現」と「記号内容」の間の相互依存の関係が対称的に働くのは、「理想的」なコードによって両者が想定されている場合であろう。つまり、それぞれの記号について、その「記号表現」と「記号内容」が十分に明確に規定されており、両者の間に排他的な一対一の対応関係がある場合である。例えば、モールス信号の場合を考えてみればよい。このような場合、「記号表現」と「記号内容」のいずれもがそれ自体自立的な体系をなしており、コードは要するに二つの体系内の要素が相互にどのように対応するかを規定しているだけである。

⁽³⁾「記号表現」と「記号内容」のいずれかが不確定である場合には、事情は異なってくる。例えば壁が何かに×印がつけてある(あるいはつけてあるように見える)場合、われわれは多分「記号」だと思うであろう。現実にはそれが「記号」であるのかどうかということは、この場合問題でない。仮りに「記号」であるとして、われわれに提示されているのは「記号表現」だけで「記号内容」の方は分からないのであるが、それでもそれを「記号」として受けとることに大きな抵抗はない。逆に、「記号内容」らしいものだけがあつて「記号表現」を伴わない場合、それを「記号」として受けとるなどということは想像し難い。

(池上嘉彦「記号論への招待」(一部改変)による)

B

*アイデンティティによって支えられた言語共同体というグループでは、共通した特徴を持つ言葉が使われています。そうした言葉の種類は、言語バリエーション (linguistic variation) と呼ばれます。

社会言語学の大きな目的の一つは、バリエーションを正確に記述することです。

じつは、言語学がすべてバリエーションに関心があるわけではありません。むしろ、関心のない分野のほうが多いくらいです。

たとえば、理論言語学 (theoretical linguistics) の第一人者チョムスキーは、均質な言語共同体 (homogeneous speech community) を仮定します。⁽⁴⁾現実の言語の多様性はひとまずカッコに入れておき、言葉の種類がない理想的な状態のなかで言葉の研究を進めるわけです。

なぜそうした方法を採用かというと、チョムスキーは、頭のなかにある知識や構造を使って適切な文を生み出す人間の言語能力 (linguistic competence) に関心があったからです。素朴に言うところ、チョムスキーにとっては、なぜ人間は、言葉の違いを超えて正しい文を作れるのか、という問いが重要なのです。

そうした立場に立つと、運用上の誤りや個人差は、考察を進めるうえで雑音になってしまいます。だから、そうしたことが起こらない理想状態を仮定するわけです。

チョムスキーのこうした姿勢は、理論物理学者が理想気体や摩擦のない平面を仮想するのと似ています。ですから、理論言語学者は、理想状態のなかで立てたモデルが現実にとどのくらい当てはまるかという演繹的な手法を探ることになります。

一方、社会言語学は、頭のなかにある理想の文を生み出す言語能力ではなく、誤りや個人差も含む実際の発話を生み出す言語運用 (linguistic performance) に関心があります。社会言語学者が言語能力に関心を持つ場合もありますが、それは状況を超えて普遍的に発揮される言語能力ではなく、あくまで特定の社会的状況に合わせて個別的に発揮されるコミュニケーション能力 (communicative competence) です。

ですから、社会言語学では、社会のなかで、話し手と聞き手とのあいだで実際に使われた発話をまず問題にします。これは、現実の物理現象を考察して法則を導き出す実験物理学の手法に似ています。研究者が頭のなかで作った文を内省で検討する理論言語学とはその点で対照的です。

こうした立場の違いは、どちらがよい、どちらが悪いと言えるものではありません。どちらの立場も、言葉の性質の一面を的確にとらえているからです。

大切なことは、理論言語学が頭のなかの言葉を問題にし、言語に共通する構造や規則など、言語の普遍的な側面を重視するのたいし、社会言語学は社会のなかの言葉を問題にし、発話として表れた言葉の差違という、言語の個別的な側面に注目するということです。

その違いがわかるように表に整理すると、つぎのようになります。

	理論言語学	社会言語学
関心の所在	言葉の普遍性・共通性	言葉の個別性・差異性
言葉の在処 ^{ありか}	ア 頭のなかにある	イ 社会のなかにある
分析の対象	ウ 言葉の能力	エ 言葉の使用
分析の観点	構造と規則	種類と選択
分析の方法	演繹的・内省的	帰納的・記述的

なお、バリエーションと似た使われ方をされるものにコード (code) があります。記号や暗号として訳される、あのコードです。

社会言語学を理解するうえで、バリエーションもコードもほぼ同じと考えて問題ないでしょう。ただ、バリエーションは言葉の種類を問題にするのたいし、コードは記号の一貫性を問題にします。バリエーションでは個々の表現の違いに注意が向き、コードでは言語体系そのものの違いに光が当たるわけです。

(石黒圭「日本語は「空気」が決める 社会言語学入門」(二部改変) による)

〔注〕モールス信号——「トン(・)」と「ツー(ー)」という符号の組み合わせで文字を表す信号。

アイデンティティ——ここでは、ある共同体に所属しているという意識のこと。

内省——自分の考えや行動を深くかえりみえること。

〔問1〕⁽¹⁾このように、「記号表現」と「記号内容」が論理的に相互依存の

関係にあるということは十分明らかであろう。とあるが、「論理的に相互依存の関係にある」とはどのような意味であるとAの筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

A 記号の意味と記号表現が対になって初めて、多くの人に共有されて機能することになることが担保されると考えられるということ。

イ 記号は記号表現に応じて具体的な意味を与えられることによって機能が確立し、主體的な判断が担保されると考えられるということ。

ウ 記号の持つ意味と記号表現を結びつけることによって、主體的な解釈の対象として機能するようになると考えられるということ。

エ 記号は記号表現に先立って意味を与えられることで初めて、その記号全体の代表として機能するようになると考えられるということ。

〔問2〕⁽²⁾ 例えば英語の sense が〈感覚〉と〈意味〉という二つの語義を併せ持っているのは、たいへん示唆的である。とあるが、なぜ「示唆的である」とAの筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア 知覚の対象である記号表現は、記号の意味という記号内容によって認知され得るという考えを暗に示しているから。
- イ 知覚できる記号表現と、記号の意味を示す記号内容との間に明確な対応関係があるという考えを暗に示しているから。
- ウ 記号表現を知覚することができてはじめて、記号の意味という記号内容が認知されるという考えを暗に示しているから。
- エ 対象を知覚できるという記号表現の側面が、記号内容の意味との対応関係を作るという考えを暗に示しているから。

〔問3〕⁽³⁾ 「記号表現」と「記号内容」のいずれかが不確定である場合には、事情は異なってくる。とあるが、どのように異なるとAの筆者は考えているか。それを、次の□□□□のように説明するとき、□□□□に当てはまる表現を、四十五字以上六十字以内で書け。

Aの筆者は、「記号表現」と「記号内容」のどちらかが不確定の場合、通常の「記号」によるやり取りとは異なり、□□□□と考えている。

〔問4〕⁽⁴⁾ 現実の言語の多様性はひとまずカッコに入れておき、言葉の種類がない理想的な状態のなかで言葉の研究を進めるわけです。とあるが、Bの筆者が「理論言語学」は「理想的な状態のなかで言語の研究を進める」と述べるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア 言語の運用の仕方や差違によってではなく、自ら知識や構造を普遍化して正しい文を作る人間の言語能力を分析の対象とするから。
- イ 言語の運用の仕方や差違によってではなく、共通する構造や規則に従って適切な文を作る人間の言語能力を分析の対象とするから。
- ウ 言語間の差違を排除し、発話された個別な文を状況に応じて適切に理解していくという人間の言語能力を分析の対象とするから。
- エ 言語間の差違を排除し、頭のなかの知識や構造を変化させながら適切な文を生み出す人間の言語能力を分析の対象とするから。

〔問5〕 次の会話は、文章A、Bを読んだ後の国語の授業の様子である。

先生と生徒の会話の中のX、Yにそれぞれ当てはまる表現を、Xは文章B中の表のA～Eのうちから適切なものを選び、

Yは三十五字以上五十字以内で書け。

先生…Bの文章の二重傍線部現実の物理現象を考察して法則を導きだ

す実験物理学の手法に似ていますについて、グループで考えてみます。二重傍線部とはどういうことをか、Aの文章の「記号」「記号機能」という言葉を使って説明してみましょう。各グループで答えができたなら、私に声をかけて答えを聞かせてください。では始めましょう。

生徒A…二重傍線部の直前に「これ」とあるから、まずは指示内容を明らかにしてみよう。

生徒イ…ええっと、一つ前の文の「社会言語学」のことを指しているんじゃないかな。

生徒ウ…そうすると、二重傍線部は一つ前の文の言い換えということになるね。じゃあまず、二重傍線部中の言葉を丁寧に見ていこう。

生徒A…「現実の物理現象を考察」っていうのは、「実際の現象の観察や実験や分析を通して、法則を生みだしたり変更したりすること」とかな。

生徒イ…「法則」という言葉には「理論」と同じような意味合いがあるから、すごくいいと思う。二重傍線部の順番通りに言ってるね。

生徒ウ…じゃあ、この二重傍線部のところを言語学的に言くと、文章Bの表にあるXに注目するということか。

生徒A…そうだね。説明に必要な要素が分かってきたよ。

生徒イ…次に文章Aについて考えてみよう。「記号」と「記号機能」の関係性のパターンを二つ挙げていたね。

生徒ウ…そうだったね。二重傍線部の「現実の物理現象」と「法則」が、それぞれAの文章の「記号」と「記号機能」のどちらに当たるのかが分かれば、関係性も見えてくるね。

生徒A…二重傍線部の「法則を導きだす」は、表にあるXについて観察や分析の結果として分かるものを指すことになるから、この場合の関係性は…。何とか書けそうだね。ちよつと書いてみよう。(しばらくして)

生徒A…できた。「現実のいろいろな物理現象を観察や実験を通して、理論や法則を生みだすのと同じように、社会言語学は、Yと

いうこと」って書いたけど、どうかな。

生徒イ…なるほど、これなら「似ています」というのも納得だね。先生にも聞いてみよう。先生、お願いします。

先生…はい。非常によく書けています。「現実の物理現象」「法則」がAの文章の「記号」と「記号機能」のどちらに当たるかに着目して書いたところが特にすばらしいと思います。

(下書き用)

工 文章 A Bともに、具体例を最初に提示したところから抽象的な内容を提示することで、一般の読者が理解しやすいようにしている。

[illegible]

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A 時秋積雨霽 新涼入郊墟

燈火稍可親 簡編可卷舒

豈不旦夕念 為爾惜居諸

恩義有相奪 作詩勸躊躇

時秋にして積雨霽れ、新涼郊墟に入る。燈火稍親しむ可く、簡編卷舒す可し。豈に旦夕念わざらんや、爾が為に居諸を惜しむ。恩義相い奪うこと有り、詩を作りて躊躇を勧ます。

時節は秋となり長雨も晴れ、新しい涼気が郊外の村にやってきた。夜のともしびとともに過す時間も増え、書物を繙くのにもふさわしい。学問のことは朝晩思わねいはずはあるまいが、月日はすぐに経つてしまふことをおまえのために惜しむのだ。情愛と道義は、⁽¹⁾両立しがたいところがあるから、ぐずぐずしがちなおまえを詩によって励ますことにしよう。「郊墟」は郊外の村、つまりこの「城南」の地を指す。「居諸」は日月のこと、『詩』^{*}「邶風」^{*}「柏舟」にもとづく。「恩義有相奪」の句からは、厳しくしなければいけないのについつい甘やかしてしまう親の情が浮かび上がるようで、なかば脅すような例を連ねてきたのも、息子の行く末を心配してのことと察せられる。この八句なら、こちら心穏やかに読める。

^{*}韓愈の詩は、大きく言えば学問のすすめであり、身近に引きつけて言え、ちゃんと勉強しないと立派な大人になれませんよ、ということであった。⁽²⁾「読書の秋」というフレーズから受ける印象とはだいぶ異なる。それは「読書」という語のもつ意味合いが違っていることともかわる

はずなのだけれども、その話より前に、そもそも「読書の秋」が韓愈の詩に由来するのだろうか、ちょっと気になる。

調べてみると、国会図書館の「レファレンス協同データベース」に、「読書の秋」とよく言われるが、その由来について知りたいという恰好の事例が掲載されていた。読めばやはり韓愈の詩が挙げられているが、「ここから秋が読書にふさわしい季節として、「秋燈」や「燈火親しむ」といった表現が使われるようになった。これが「読書の秋」の由来のひとつと思われる」ということで、「燈火稍可親」↓秋は読書にふさわしい季節↓「読書の秋」のように、間に一つはさまっている感だ。用例からみても、「読書の秋」が近代以降に登場した言い回しであることは、ほぼ疑いない。「由来」という語をどのような意味で使うかにもよるが、韓愈の詩に由来すると簡単に言えないことはたしかである。

さらに、「読書週間が秋に実施されるため、「読書の秋」が定着したのではないか」という調査もなされていて、それによれば読書週間が「図書館週間」として始まったのが一九三三年十一月、ただしなぜこの時期になったかは不明、また「読書の秋」というフレーズはこれより先、一九一八年の新聞記事に見えろとのこと。

人任せですませては韓昌黎先生に怒られそうなので、自分でも明治大正期の文献を少し当たってみたところ、東京高等師範学校附属小学校内に設置された初等教育研究会の編集にかかる雑誌に「読書の秋来た」という文章が二回にわたって掲載されていた。一九一一年十月および十一月発行の号である。書き出しはこんなふうだ。

読書の好時季が来た。何か心ゆくまで耽読し得る書が欲しいものである。平生義務と思ひ必要に迫られて読む書は、人を疲らすのみである。読まなければ務が務まらない様に感ぜしめる書は、実に心を束縛するものである。

著者は「蒼鶯」というペンネームを名乗っているが、じつは当時東京高等師範学校附属小学校訓導だった佐々木秀一。のちに鶴見俊輔が『思い出袋』で小学校時代の校長先生としてなつかしく回想しているその人なのだった。書き出しから思わすうなずきながら読んでしまう「読書の秋来たる」は、時節の随想でも立身のための学問のすすめでもなく、堂々たる近代読書論である。韓愈の詩が出てこないのも、「読書は生活を拡張して、之を広くし之を長くする。読書は生活を変化して之を多方面にし之を多趣味にする」という著者の主張からすれば、当然のことかもしれない。佐々木の唱える「読書」は韓愈の「読書」とはすでに異なっている。

この文章のタイトルが「読書の秋来たる」となったのは（ちなみに雑誌の表紙では「読書の秋」となっている）、おそらくそれほど強い意図があったわけではなく、反対に、用例としてはまた別に求めることができるかもしれない。ただ、人口に膾炙するということになると、やはり大正から昭和にかけてと考えられる。秋の読書週間の宣伝とも無縁とは言えまい。制度としての裏付けを得られれば、ことばの流通は飛躍的に加速する。そのとき、近代以前からの「燈火親しむべし」また「秋燈」という秋の読書のイメージが重なって用いられたのであろう。たしかに「燈火稍可親」は、それはそれとして日本ではなじみの句であった。

なぜ「燈火稍可親」がなじみの句だったのかについては、明確な理由がある。『古文真宝』の前集巻頭に並べられている「勸学文」に収められているからだ。『古文真宝』は南宋末ごろに編纂された古詩古文のアンソロジー（前集が詩、後集が文）で、いまに伝わるものでは元の刊本が古い。編者は黄堅とされているが、詳しいことはわからない。つまりそれほど由緒正しい本というわけではないのだが、元から明にいたる時代に流布し、日本にも室町期に将来され、五山版をはじめとして多くの和刻本が明治に及ぶまで出版された。漢詩文の入門書としてよく用いら

れたのである。朝鮮半島でも版本が多い。

「勸学文」は、その巻頭に掲げられた特別なまとまりである。宋の真宗および仁宗、司馬光、柳永、王安石、白居易、朱熹の「勸学文」（「勸学」「勸学歌」と称する篇もある）および韓愈の「符讀書城南」の八篇から構成されるが、「文」という題がついていても、その多くは韻を踏む。つまり暗誦のための標語に近いもので、この八篇が独立して扱われることもあり、古くは慶長二年（一五九七）に後陽成天皇の命によって、最新の試みであった古活字で印行されてもいる。

たとえば真宗の「勸学」。

B 富家不用買良田 書中自有千鍾粟

安居不用架高堂 書中自有黃金屋

出門莫恨無人隨 書中車馬多如簇

娶妻莫恨無良媒 書中有女顏如玉

男兒欲遂平生志 六經勤向窓前讀

家を富ますに良田を買うを用いず、書中自ら千鍾の粟有り。
居を安んずるに高堂を架するを用いず。書中自ら黄金の屋有り。
門を出ずるに人の随う無きを恨む莫れ、書中車馬多きこと簇るが如し。妻を娶るに良媒無きを恨む莫れ、書中女有り顔玉の如し。男兒平生の志を遂げんと欲せば、六經勤めて窓前に向いて読め。

訓読だけでも意味はとれるほど、語彙も内容も形式も平俗である。勉強さえすれば何でも手に入る。そういうことだ。

その後に続く諸家の「勸学文」も、多少の工夫はあるにせよ、勉強しなさいというトーンが変わるわけではなく、さして興を覚えるものでも

ないのだが、朱熹の「勸学文」はいささか身につまされるところがある。

C 勿謂今日不学而有来日 勿謂今年不学而有来年

日月逝矣 歳不我延

嗚呼老矣 是誰之愆

謂う勿れ 今日学ばずとも而も来日有りと、謂う勿れ 今年学ばずとも而も来年有りと。日月逝けり、歳我と延びず。嗚呼老いたり、是れ誰が愆ちぞや。

「日月逝矣、歳不我延」は、『論語』陽貨篇冒頭で陽貨が孔子に仕官を勧めて「日月逝矣、歳不我延（日月逝けり、歳我と与にせず）」と言ったことを用いている。「延」としたのは「年」「愆」と韻にするため。ちなみに「是誰之愆」も『論語』季氏篇に「是誰之過歟」の句があるのを思わせる。それにしても、こんな文章が壁に貼ってあったりするとかえって気が滅入りそうだ。

こうした「勸学文」に比べれば、「符読書城南」は格調をそなえた古詩で、「時秋積雨霽」からの結びも見事だ。というよりも、真宗以下の「勸学文」が、いかに啓蒙とはいえ、諸家の名にふさわしいものとは思えないのである。また、白居易にしても王安石にしても朱熹にしても、古くからそれぞれの詩文集が編まれているのに、これらの作は録されていない。

真宗の「勸学」については大木康氏がくわしく論じられていて、「おそらく、もともとどこかの誰かが作った作が、南宋の終わりがち、真宗皇帝の作とされたということだったのではなからうか」とし、さらに「『宋真宗』と『勸学文』との結びつきには、あるいはこの『古文真宝』が深く関わっているのではないかと推測されている。類々に倣えば、真宗以外の「勸学文」もまた「どこかの誰か」が作ったもので、権威づけ

のために諸家の名が用いられたとしてよいのかもしれない。一方で、韓愈の「符読書城南」は、まぎれもなく韓愈がその子のために作った詩で、他の「勸学文」とは一線を画している。どういう経緯でこれが「勸学文」に置かれることになったのか、あるいはこの八篇がどのようにしてひとまとまりのものとなったのか、事は『古文真宝』の成り立ちにもかかわって探索を試みたいところだが、いかにせん材料に乏しい。

ともあれ、「勸学文」とともに流布したことで、「符読書城南」は広く読まれた。その詩の最後に添えられた秋の季節感は、ちょうど「勸学文」全体の結びとしても機能し、人々の心に印象づけられた。やがて世は移り、読書が立身出世とは別に多くの人に享受される時代を迎える。

（齋藤希史「漢文ノート——文学のありかを探る」（一部改変）による）

〔注〕城南——中国の唐の時代の都、長安の南の意。

〔詩〕邶風「柏舟」——中国最古の詩集「詩経」の邶風篇にある

「汎たる彼の柏舟」で始まる漢詩のこと。

韓愈——中国の唐の時代の文章家、詩人。韓昌黎とも呼ばれた。

耽読——夢中になって本を読みふけること。

疲らす——疲れさせる。

感ぜしめる——感じさせる。

訓導——旧制小学校の教員の呼び名。

人口に膾炙する——広く世間の人々の話題となる。

『古文真宝』——中国の先秦時代から宋の時代までの詩文の選集。

南宋——中国の王朝の一つ。

黄堅——中国の北宋時代の書家、詩人、文学者。

明——中国の王朝の一つ。

将来——ここでは、持つてくるという意味。

五山版——鎌倉末期から室町末期に京都・鎌倉の五山の僧を中心
に作られた木版本の総称。

和刻本——中国や朝鮮の書物を日本で再製作したもの。

真宗および仁宗——どちらも中国の北宋の時代の皇帝。

司馬光——中国の北宋時代の政治家、学者。

柳永——中国の北宋時代の詩人。

王安石——中国の北宋時代の詩人。

白居易——中国の唐の時代の詩人。

朱熹——中国の南宋時代の儒学者。

「符読書城南」——韓愈の詩。本文冒頭の「時秋積雨霽」はこの

詩の一節。

古活字——江戸時代に木活字または銅活字を使って印刷、刊行

された書物。

鍾——中国の春秋戦国時代の容量の単位。

粟——アワなどの穀物。

良媒——結婚を取り持つのにすぐれた人。

陽貨——中国の春秋戦国時代の政治家。

仕官——役人になること。

季氏——中国の春秋戦国時代の政治家。

是誰之過歟——「これは誰の過ちですか」という意味。これは

『論語』季氏篇第十六にある漢文の一節。

擧めに倣えば——ここでは、他人にみならえばという意味。

〔問1〕⁽¹⁾ 両立しがたいところとあるが、この語句に対応する語句を、
Aの漢詩の中からそのまま抜き出して書け。

〔問2〕⁽²⁾ 「読書の秋」というフレーズから受ける印象とはだいぶ異なる。
とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として

最も適当なものは、次のうちではどれか。

A 韓愈の詩の「燈火稍可親」をもとにして、人々が秋の夜に読書をする
ようになったことから「読書の秋」という言葉が広がったという考
えは、「読書」のもつ意義の一面しか反映していないから。

I 「読書の秋」は、韓愈の詩ではなく、日常で義務として必要に迫られ
て読む書を再度心ゆくまで味わうことで自身を成長させるという佐々
木の「読書」に関する考えをもとにしたものであるから。

U 「読書の秋」の「読書」は、佐々木が「読書の秋來たる」で述べた、
生活を変化させ拡張させるという近代読書論に立脚したものであり、
韓愈の詩で述べられている内容とは大きなずれがあるから。

工 「読書の秋」とは、「図書館週間」が秋に実施されることによって
使われ始めた表現であり、「読書」とは自分の好きな本を好きなように
読むものであるという考えと大きな隔たりがあるから。

〔問3〕 たしかに「燈火稍可親」は、それはそれとして日本ではなじみの句であった。とあるが、筆者が「なじみの句」と考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものは、次のうちではどれか。

ア 中国の元時代に刊行された由緒正しい漢詩文の入門書の冒頭に掲載されており、明治時代まで日本でも広く使用されたから。

イ 中国で広く読まれていた漢詩文の入門書を模して刊行された漢詩集の冒頭に掲載され、室町時代以後、多くの人の目に触れたから。

ウ 漢詩の基本的技能を学ぶための入門書の冒頭に暗誦教材として掲載され、日本人にとって近代以前からなじみがあったから。

エ 室町時代に日本に伝来して、明治に至るまでの長い間、漢詩文の入門書として広く用いられた本の冒頭に掲載されていたから。

〔問4〕 論じられとあるが、この「られ」と同じ意味で使われているものを、次の各文の――を付けたものの中から一つ選べ。

ア 校長先生と私たち生徒の力で看板が立てられた。

イ 校長先生が卒業式で生徒への祝辞を述べられる。

ウ 校長先生のお話には生徒への期待が感じられる。

エ 校長先生から昇降口の前で声をかけられる。

〔問5〕 漢詩Aと漢詩B、Cとの違いをどのようなのだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものは、次のうちではどれか。

ア 漢詩Aが、学ぶことの必要性を風景描写や心情表現を交えてえん曲的に述べた、作品の由緒も確認できる作品であるのに対し、漢詩B、Cは、「勸学」の成果や姿勢を啓蒙に重きをおいて述べた、権威ある諸家によって書かれたかも知れないということ。

イ 漢詩Aが、書物によって教養ある人間となることの重要性を家族相手に口語調で表現されている作品であるのに対し、漢詩B、Cは、知識の獲得が立身出世につながるということを、国民全体へ啓蒙するために印象深い短い語を多用しているということ。

ウ 漢詩Aが、自身の子の将来を心配し、風景描写等を交えてやさしく学ぶことの必要性を説明する作品であるのに対し、漢詩B、Cは、どちらも学ぶことによって得られる将来の功績を直接的に不特定多数に対して啓蒙する形で表現されているということ。

エ 漢詩Aが、読書にふさわしい季節を挙げることによって、自身の子を学びへ促し、その態度を賞賛した作品であるのに対し、漢詩B、Cは、学問の意義だけを啓蒙することに重きをおき、平易で直接的な表現を用いて簡潔に述べられているものということ。